

歌人がうたい 武将が治む

The Tanka Poets sing and Samurai govern

古代より琵琶湖に面した風光明媚な地域だけに、文化的にも政治的にも脚光を浴びてきました。和歌・短歌・俳諧などに詠まれた詩歌も数多く、宗祇などの歌人を輩出してきました。また都に近いので、武将の多くが群雄割拠して相争い、しのぎをけずってきました。

万葉と荘園の奈良・平安時代



(万葉集巻七)

- ・波庫山は 織山
- ・「わが背」は「私の夫」の意

(万葉集巻一五)

- ・処女と乙女を掛けている
- ・野島が崎は福堂地先の地名

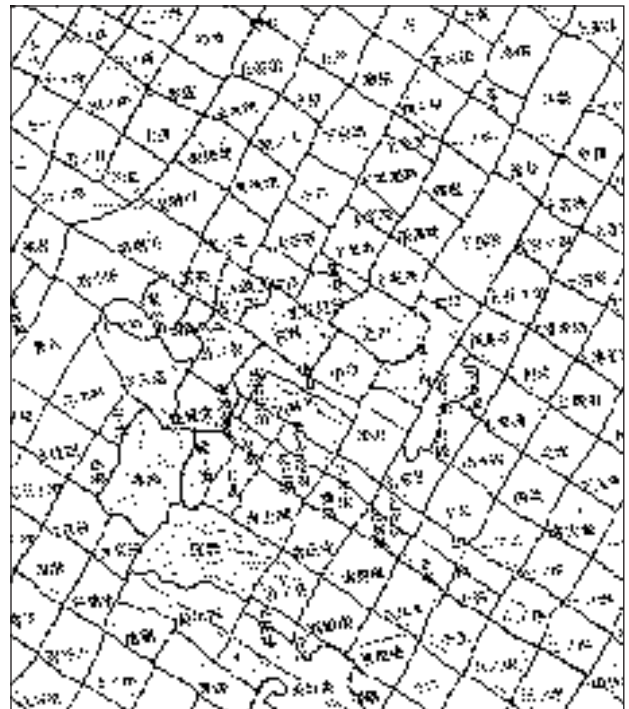
社寺・貴族の荘園支配

500年にわたるこの時代は寺院の権力支配が強く、土地や人民は寺院の支配下に置かれたり、貴族階級が台頭してくると、より荘園化が進んでいきました。

この地方の荘園の多くは比叡山延暦寺領であったため、武士勢力の支配を拒んでいました。

- 垣見庄**: 小幡、中、築瀬、和田、河曲(現・五個荘)、佐生、佐野、林、猪子、長勝寺、神郷、種、服部(現・彦根)、今、垣見、躰光寺(佐野庄、花垣庄ともいう)
- 伊庭庄**: 伊庭、能登川、安楽寺、北須田、猪子、林、山路、佐野、垣見、躰光寺、小川
- 栗見庄**: 栗見北庄 - 本庄、田付、新海(現・彦根)
: 栗見南庄 - 栗見新田、福堂、乙女浜、新村、阿弥陀堂、小川、宮西
- 因幡庄**: 甲崎、田原、出路、稲葉、普光寺、三つ谷(現・彦根)、小川、今、川南

* 字名が重複している荘園があるが、分割して所領にしたり、所領替え・年代差などがあったため。



小川小字図(条里制)

佐々木氏台頭の鎌倉・室町時代

近江守護・佐々木氏

宇多天皇の第八王子敦実親王を祖とする佐々木源氏は、安土の沙々貴神社の神主や佐々木庄の下司職（莊園において実際の莊務を行う莊官）でしたが、鎌倉幕府の成立（1192年）とともに、定綱が近江守護となり、世襲するところとなりました。

承久の乱（1221年）後、佐々木氏所領を兄弟が分割相続し、これが後世の六角氏と京極氏の宿命的対立の原因となったのです。

南北朝時代（1336～92年）になると、京極道誉が勢力を伸ばしてきており、一方この頃、六角氏は観音寺山に城を構え、両家はしのぎを削るようになってきました。

佐々木氏の武将

佐々木氏は本城のあった観音寺城の周辺に、自分の家臣団を配置しました。

町内に割拠した家臣はそれぞれ村落を支配下におさめ、中央に館（城）を設けて守りを固めました。

守護代・伊庭氏

伊庭氏は佐々木氏の一族で、伊庭に在住してその姓を名乗り、鎌倉時代には地頭職に補され、佐々木氏が守護となるや守護代として重要な地位に上り、近江の国政を左右しました。また、伊庭内湖をはじめ琵琶湖の湖上権も掌握し水軍をもって、物資の輸送や漁業はもとより軍事上においても絶対的な権力を保持していました。

室町時代になると、佐々木氏の弱体化と下剋上の嵐の中で、伊庭氏は主家をないがしろにするようになり、文亀2年（1502）伊庭貞隆が佐々木家に謀反して敗れ、のちにその子貞説の代に没落し、各地に分散しました。



観音寺城本丸石垣

各武将の城——館

種村氏 佐々木氏の支流、種村に居館。大橋姓はその子孫（後方種村氏）。先方種村氏は伊庭氏からの別家で八仏手城（種村の西側）を築いたが、伊庭氏没落時に各地に分散。

新村氏 佐々木氏一族、志村に居館。信長勢に抗して籠城し670人の犠牲を出し、落城（1571年）。

小川氏 小川に居館。元亀2年（1571）、信長勢に7人の人質を出して降伏、落城。

後藤氏 佐生城、佐々木氏の下屋敷。

その他、須田氏、猪子氏、国領氏などがいました。



伊庭城址（勤節館）

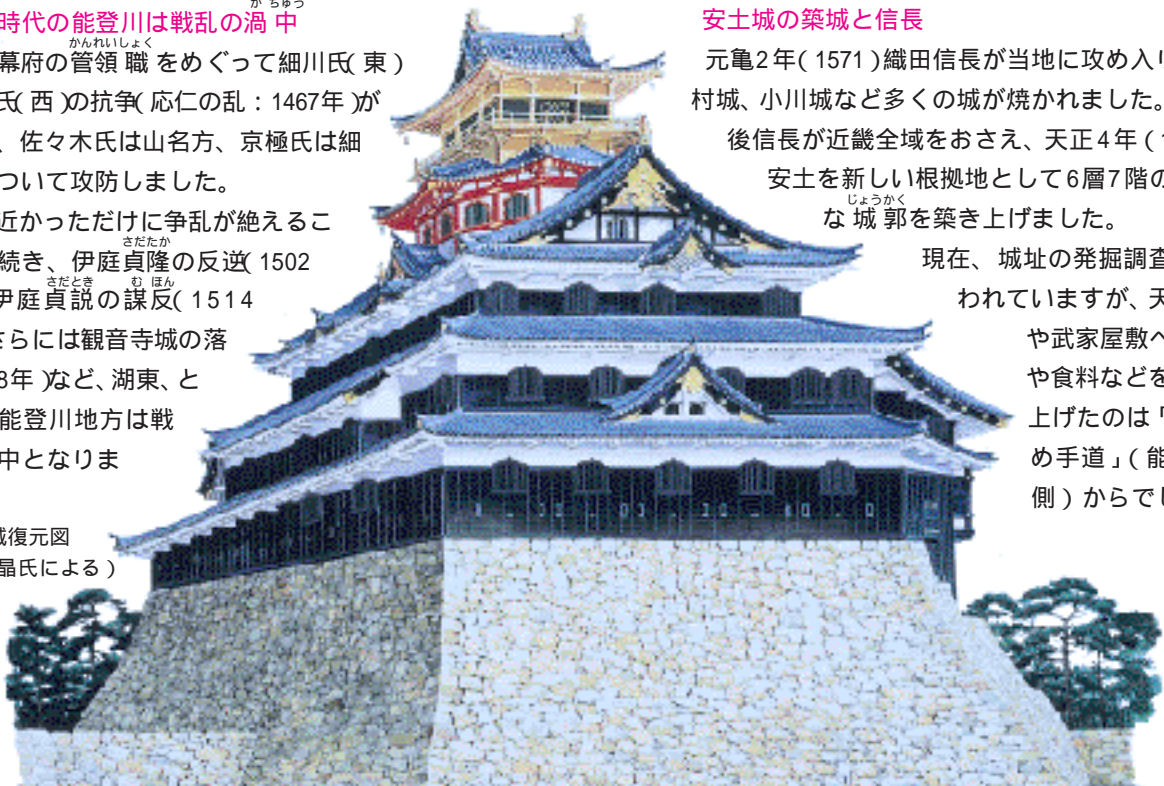
戦国の世から安土・桃山時代

戦国時代の能登川は戦乱の渦中

室町幕府の管領職をめぐって細川氏(東)と山名氏(西)の抗争(応仁の乱:1467年)が起こり、佐々木氏は山名方、京極氏は細川方について攻防しました。

都に近かっただけに争乱が絶えることなく続き、伊庭貞隆の反逆(1502年)、伊庭貞説の謀反(1514年)、さらには観音寺城の落城(1568年)など、湖東、とりわけ能登川地方は戦乱の渦中となりました。

▶ 安土城復元図
(内藤晶氏による)



安土城の築城と信長

元龜2年(1571)織田信長が当地に攻め入り、志村城、小川城など多くの城が焼かれました。その後信長が近畿全域をおさえ、天正4年(1576)安土を新しい根拠地として6層7階の豪華な城郭を築き上げました。

現在、城址の発掘調査が行われていますが、天守閣や武家屋敷へ資材や食料などを運び上げたのは「からめ手道」(能登川側)からでした。

秀吉と桃山文化

本能寺の変(1582年)で信長が討死すると、天下に誇る金箔で覆われた豪華絢爛の安土城も焼失、落慶後わずか4年でした。その後は豊臣秀吉の時代となり、一時的

には平穏な世の中になっていきました。この頃、生花や茶道が盛んになり、世に桃山文化と呼ばれています。しかし、秀吉死後、関ヶ原の合戦(1600年)、大坂冬・夏の両陣を経て、徳川幕府の支配となりました。



安土山の眺望



安土城の「からめ手道」

彦根藩・大和郡山藩等支配の江戸時代

(やまとこおりやま)

領主の支配

彦根藩領(井伊氏)

福堂・乙女浜・宮西・新村・阿弥陀堂・川南・小川・今・垣見・躰光寺・山路の計11カ村、約8000石。後には開拓された栗見新田、栗見出在家が加えられました。

大和郡山藩領(本多氏から柳澤氏へ)

種・長勝寺・神郷・佐生・佐野・猪子・林を所領。天和2年(1682)に館林領から大和郡山藩に転封(幕府が命令して大名の所領をかえること)され本多氏領となりましたが、享保9年(1724)、御家断絶により柳澤氏領となりました。



彦根城

惣見寺領(安土山)

天正20年(1592)豊臣秀吉によって豊浦庄(南須田を含む)100石が寄進され、以来、徳川秀忠・家光らによっても所領が安堵され、寺領となりました。

三枝氏領

元禄11年(1698)旗本の三枝氏は甲州より近江に転封され、知行地7000石のうち2000石を伊庭村に領し、ここに代官所を置いて支配していました。



安土城内にあった惣見寺の裏門(南須田の現超光寺山門)

彦根藩知行主の一覧(能登川町域)

知行主の分散的知行

知行制の例(木俣土佐:彦根藩筆頭家老)

	石	斗	升	合
川南	575	3	5	8
山路	112	3	7	6
躰光寺	143	0	7	6
小川	310	0	6	6
新村	192	7	8	8
阿弥陀堂	131	3	8	5

1石 = 180升 (10斗 = 100升 = 1000合)

知行主による村の分割支配(相給)の例(山路村)

	石	斗	升	合
木俣土佐	112	3	7	6
庵原主税助	42	7	4	3
西郷伊豫	114	6	5	5
中野若狭	79	3	3	3
宇都木下総	130	4	9	2
沢村角右衛門	102	2	4	9
戸塚左太夫	104	5	1	3
印具寿之介	30	0	0	0
岡本半介	140	1	7	7

小堀遠州と伊庭御殿

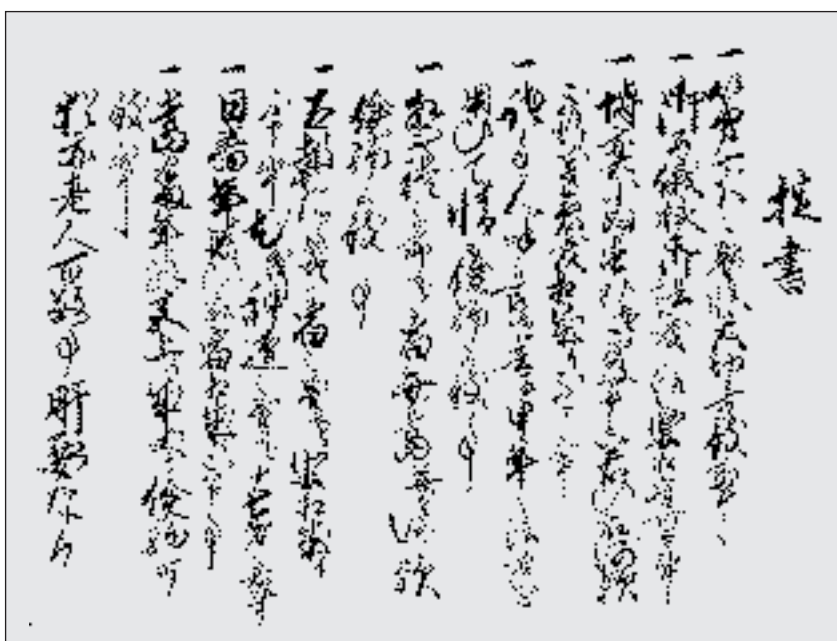
関ヶ原の合戦は徳川家康（東軍）の大勝で終止符が打たれ、慶長8年（1603）江戸に幕府が開かれました。その後、将軍が江戸から上洛するとき、護衛上の濠や土塁をめぐらした城郭風の宿館が必要でした。

当地はその頃豊臣方の力が残存していたため、堅固な御茶屋風の宿泊所でなければなりません。そこで、湖北出身の作事奉行小堀遠州に家光上洛の宿として「伊庭御殿」を造営させました。この地を現在は「御殿地」と呼んでいます。「寛永11年甲戌年伊庭御茶屋御作事之事 小堀遠江守」（中井忠重氏蔵文書）という古文書により将軍家光が泊まったと推定されています。



伊庭御殿地跡

農民の暮らし



農民に対する「投書」要旨

- ・火の要慎大切にすべし
 - ・御公儀様の御法度は堅く守るべし
 - ・「人呼び」はせいぜい儉約すること
 - ・祭礼の際の馳走も儉約すべし
 - ・日番の若衆宿はひかえるべし
 - ・当番年の宮上りはなるだけ儉約すること
- なお、老人がとりしきることが肝要である。

▶「投書」文書（乙女浜所蔵）

近江商人の活躍

当町出身の近江商人は、主に麻布・呉服・太物・肥料の行商販売を行いました。

取引先は江戸・京都・大坂をはじめ、北海道・九州など全国に及んでいました。とくに、当町能登川出身の阿部氏一族の活躍はめざましいものがありました。

また、今出身の中村家（大橋氏）は北前船による通商に従事し、北海道江差町を舞台に活躍し繁栄しました。その縁により能登川町は江差町と姉妹提携をしています。



近江商人の行商姿（『近江商人事績写真帖』より転載）